蔵書評価研究グループ
研究活動報告

大学図書館における蔵書評価：
チェックリスト法を用いた蔵書評価

瀬戸山雄介（学習院大学）

伊東　康子（女子美術大学）

椎名ちか子（明治学院大学）

清水　滋文（和光大学）

1. 研究の背景・目的

大学図書館の選書は、主に教員と図書館員が行っている大学が殆どです。つまり、蔵書構築は教員の研究分野と図書館員の経験と知識に委ねられているということができ、最も図書館員の専門性が問われる業務の一つであるといえます。また、図書館において蔵書は、言うまでも無く最も重要な経営資源であり、その構築は図書館業務において最も重要な業務の一つということができます。

しかしながら、人事的な理由により、経験年数の浅い図書館員が選書業務を担当している大学図書館が少なくないことが現状として挙げられます。そのような状況においても、蔵書評価を定型的な業務として実施している大学は多くありません。

このような中で、「自館が適正な蔵書構築を行えているかどうか」といった不安を抱くのは当然のことかと思います。しかしそのような不安を解消するための行動、つまり蔵書評価を行っている大学図書館は多くありません

そこで、私達のグループでは、蔵書評価法の一つである「チェックリスト法」を実施し、実際に蔵書評価を行ってみることにしました。時間的な制約から、「チェックリスト法」の実施を主目的としています。蔵書評価の対象は狭いカテゴリーとなっています。「チェックリスト法」から得られたデータの分析も十分とは言えませんが、その実施方法と実施後の所感、そして他の蔵書評価の事例の紹介を中心に報告していきます。

2. 研究手法

蔵書評価手法には、大きく分けて「蔵書中心評価法」と「利用中心評価法」の 2 つの手法が存在します。利用中心評価法は、貸出回数や蔵書回転率、貸出当り費用などを指標として何を残していくべきかを知るためのものですが、利用者中心評価法だけでは蔵書の質を評価するのは困難です。一方の蔵書中心評価法では、利用者中心評価法では評価しきれない蔵書の質を評価することが可能です[1)]。よく知られている手法としては、「チェックリスト法」、「引用分析法」、「専門家調査法」などがあります[2)]。

本グループでは、蔵書中心評価法の一つであるチェックリスト法を採用することとしました。チェックリスト法は、チェックする目的に応じて基準となるリストを作成し、そのリストをもとに、所蔵率の調査を行うものです。

本グループがチェックする目的は、「経営学の組織論分野において、学部学生が必要とする資料を所蔵しているかを調査すること」です。経営学の組織論を主題として扱うことにしたのは、学問として成立してからの歴史が比較的浅いために取り組みやすいこと、またメンバーの組織論に対する関心が高かったことなどが理由です。

評価結果の分析では、どこの大学が優れているということではなく、各項目の相関をみることで、蔵書構築へ与える要因を探り、また平均値から大きく外れたものについて分析を加えることで、実務への示唆を得ることを目的としています。

3. 蔵書評価手順

蔵書評価実施手順は、以下の通りです。

０）目的の設定
１）対象主題の設定
２）調査対象の設定
３）基本資料の設定
４）チェックリストの作成
５）集計・蔵書評価の実行

０）目的の設定

本グループがチェックする目的は、「経営学の組織論分野において、学部学生が必要とする資料を所蔵しているかを調査すること」です。

１）対象主題の設定

チェックリストが対象とする主題範囲を限定します。本報告では、「経営学の組織論」に限定しました。

２）調査対象の設定

調査の対象とする図書館を決定します。本報告では、「経営学系の学部を持つ大学の図書館」に限定しました。

３）基本資料の設定

限定した主題範囲に応じて、WebcatPlus でタイトル検索を行い、所蔵館数の多い順に下記の上位 5 位を「基本資料（下記参照）」としました。具体的には、「組織論」で検索し、タイトルを見て明らかに専門的すぎるもの、狭義のテーマのもの、主題から外れるものを除き、その後一つ一つの資料の所蔵館数を調査し、絞り込みました。図書館が所蔵しているということは、その大学において有益であると考えられて購入されているので、所蔵館数が多いということは、その資料に一定の価値があると考えられます。

（基本資料）

桑田耕太郎, 田尾雅夫. 組織論. 東京, 有斐閣, 1998, 392p.
岸田民樹編. 現代経営組織論. 東京, 有斐閣, 2005, 301p.
高柳暁編著. 現代経営組織論. 東京, 中央経済社, 1997, 210p.
十川廣國編著. 経営組織論. 東京, 中央経済社, 2006, 216p.
高橋正泰[他]著. 経営組織論の基礎. 東京, 中央経済社, 1998, 233p.

４）チェックリストの作成

リストアップされた基本資料 5 冊に含まれる参考文献、引用文献をリスト化しました。各タイトルの記入項目は、「NCID」、「タイトル」、「巻・号・年次」「論題名」「責任表示」「出版社」「出版年」「版」「シリーズ名」です。基本資料 5 冊をグループ全員で分担してリスト化しました。また、文献の出現回数によってリストをソートし、出現回数の多い順に並べ替えました（7. 資料を参照）。

５）集計・蔵書評価の実行

作成したチェックリストを利用して各大学の資料所蔵数（チェックリストに記載されている資料を何冊所蔵しているか）と図書費、学生数、一人当たりの図書費、蔵書数、雑誌種数、国公私の別等に注目して比較評価を行いました（図書費等の各数値は、『日本の図書館』から引用）。具体的には、WebcatPlus を用いてタイトルごとの所蔵館を調査し、その中から経営学関係の学部を持つ大学の図書館を絞り込みました。その後、図書の所蔵数に応じて経営学関係の学部を持つ大学の図書館をⅠ～Ⅳに級区分し、その他の図書費等も同様に一定の範囲に応じて級区分し所蔵の級とクロスする表を作成しました。

4. 評価結果

評価するにあたり、前提として次のことに注意を払いたいと思います。使用したチェックリストは、「経営学の組織論分野において、学部学生が必要とする図書を所蔵しているかを調査すること」を目的としたものですので、蔵書の質を測る唯一の基準ではありません。以下では、蔵書の質という言葉を頻繁に使用しますが、あくまでチェックリストが対象とする主題の範囲内においての蔵書の質を意味しています。

4.1. 図書の評価結果

下記の（表 1）は、所蔵数の級区分を行ったものです。所蔵数の最大値は 81、中央値は 47、最小値は 28 でしたので、Ⅱ級以上の所蔵を持つ大学は平均以上の蔵書を持つということが出来ます。

（表 1）

級	所蔵数	大学数(全体の中の割合)
Ⅰ	70～84	10(11%)
Ⅱ	55～69	16(17%)
Ⅲ	40～54	35(38%)
Ⅳ	25～39	32(34%)

※( )内の数値は小数点以下四捨五入

それでは、集計した結果をひとつずつ見ていきます。まず、(表 2)「所蔵数と学生数の関係」です。

(表 2)「所蔵数と学生数の関係」

		学生数（人）				
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ：15,000～19,999	Ⅲ：10,000～14,999	Ⅳ：5,000～9,999	Ⅴ：～4,999
所蔵数	Ⅰ：70～84	2(14%)	4(44%)	1(6%)	3(9%)	0(0%)
	Ⅱ：55～69	4(29%)	2(22%)	2(11%)	6(18%)	2(11%)
	Ⅲ：40～54	3(21%)	3(33%)	10(56%)	12(35%)	7(39%)
	Ⅳ：25～39	5(36%)	0(0%)	5(28%)	13(38%)	9(50%)

※( )内の数値は学生数各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

(表 2) 中の所蔵数がⅡ級以上の( )内の数値に注目すると、学生数がⅠ～Ⅱ級の大学の割合は高いが、Ⅲ～Ⅴ級の大学の割合は少なく、また所蔵数がⅢ級以下の大学については、学生数がⅢ～Ⅴ級の大学の割合が多くなっています。以上のことから、学生数がⅡ級以上、つまり 15,000 人以上であることは平均以上の蔵書を持つために、有利な条件として働いているということができます。ただし、学生数が 20,000 以上であっても所蔵数がⅣ級の大学もあることから、強い相関があると言う事はできないと考えます。

次は、(表 3)「所蔵数と図書費の関係」についてです。

（表 3）「所蔵数と図書費の関係」

		図書費（万円）			
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ ： 10,000～19,999	Ⅲ ： 5,000～9,999	Ⅳ ：～4,999
所蔵数	Ⅰ：70～84	5(25%)	2(12%)	1(5%)	2(6%)
	Ⅱ：55～69	7(35%)	2(12%)	3(15%)	4(11%)
	Ⅲ：40～54	5(25%)	9(53%)	7(35%)	14(39%)
	Ⅳ：25～39	3(15%)	4(24%)	9(45%)	16(44%)

※( )内の数値は図書費各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

図書費が多い大学ほど、多くの図書を購入できるので図書費に応じて所蔵数が高まることは簡単に想像することができます。結果を見ると、図書費がⅡ～Ⅳ級の大学においては所蔵数がⅡ級以上である率が 20%前後であるのに対して、図書費がⅠ級の大学においては 60%を示していることから、20,000（万円）以上の図書費があることが、所蔵数に対して有利な条件として働いていることが分かります。しかし、図書費がⅠ級の大学であっても所蔵数がⅢ級以下であったり、逆に図書費がⅣ級であっても所蔵数がⅠ級の大学があることから、図書費が蔵書の質を決める決定的な要因と言う事はできないと考えます。

次は、（表 4）「所蔵数と学生一人当たり図書費の関係」についてです。

（表 4）「所蔵数と学生一人当たり図書費の関係」

		学生一人当たり図書費（円）				
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ：15,000～19,999	Ⅲ：10,000～14,999	Ⅳ ： 5,000～9,999	Ⅴ ：～4,999
所蔵数	Ⅰ：70～84	1(25%)	2(15%)	4(21%)	1(3%)	2(11%)
	Ⅱ：55～69	2(50%)	2(15%)	4(21%)	6(16%)	2(11%)
	Ⅲ：40～54	0(0%)	5(38%)	8(42%)	15(49%)	7(37%)
	Ⅳ：25～39	1(25%)	4(31%)	3(16%)	16(32%)	8(42%)

※( )内の数値は学生一人当たり図書費各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

学生一人当たり図書費各級の( )内の数値で、最も大きいものを挙げると、Ⅰ級では所蔵数がⅡ級の大学が多く、Ⅱ級では所蔵数がⅢ級、Ⅲ級とⅣ級では所蔵数がⅣ級の大学が最も多くなっています。この「所蔵数と学生一人当たり図書費の関係」においても、（表 2）～（表 3）同様、僅かな関係は認められるが、大きな影響を持つ要因ではないといえます。図書費と蔵書の関係については、「学生一人当たりの図書費が多ければ、蔵書の質は上がる」というのは当然のように思いますが、今回の結果を見ると必ずしもそうとは言えません。減少しつつある昨今の大学財政の状況を考えると、図書費だけが全てではないという結果

は希望の持てるものかもしれません。

（表 5）「所蔵数と蔵書数の関係」

		蔵書数（千冊）				
		Ⅰ：3,000～	Ⅱ：2,000～2,999	Ⅲ：1,000～1,999	Ⅳ：500～999	Ⅴ：～499
所蔵数	Ⅰ：70～84	4(40%)	2(18%)	2(9%)	2(6%)	0(0%)
	Ⅱ：55～69	4(40%)	3(27%)	3(14%)	4(12%)	2(13%)
	Ⅲ：40～54	2(20%)	3(27%)	11(50%)	13(39%)	5(31%)
	Ⅳ：25～39	0(0%)	3(27%)	6(27%)	14(42%)	9(56%)

※( )内の数値は蔵書数各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

所蔵数のⅠ級を見ると蔵書数のⅤ級から徐々に( )内の数値が上昇しています。所蔵数のⅡ級についてもほぼ同様に上昇しています。所蔵数のⅢ級になると今度は、蔵書数のⅠ級から徐々に数値が上昇し、蔵書数のⅢ級で最大となり徐々に減少します。所蔵数のⅣ級では、蔵書数のⅠ級からⅤ級にかけて徐々に上昇していきます。これは、（表 2）～（表 4）では、見ることが出来なかった傾向です。したがって、「所蔵数と蔵書数の関係」には、（表 2）～（表 4）よりもはっきりとした相関があると考えられます。さらに蔵書数は、図書費とも、もちろん関係がありますが、それよりも大学が創立して何年経過しているかが大きな要因となると推測しています。したがって、「大学の歴史が蔵書の質へ与える影響は図書費よりも大きなものがある」と推測します。

次に（表 6）「所蔵と設置母体の関係」について考察します。

（表 6）「所蔵数と設置母体の関係」

		設置母体		
		国立	公立	私立
所蔵数	Ⅰ：70～84	6(15%)	2(22%)	2(4%)
	Ⅱ：55～69	8(21%)	0(0%)	8(18%)
	Ⅲ：40～54	15(38%)	4(44%)	16(36%)
	Ⅳ：25～39	10(26%)	3(33%)	19(42%)

※( )内の数値は設置母体各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

所蔵数の級がⅡ級以上の割合をみると、国立が 36%、公立が 22%、私立が 22%であることから、比較的国立大学の方が蔵書の質が高い傾向があるといえます。また、（表 5）から導いた推測（「大学の歴史が蔵書の質に与える影響は図書費よりも大きなものがある」）を考慮すると、国立大学のほうが総じて大学が持つ歴史が長いため、このような結果が出

ているのだと推測できます。

次は、（表 2）～（表 4）の補足になりますが、（表 7）「学生数と図書費の関係について」考察します。

（表 7）「学生数と図書費の関係について」

		図書費（万円）			
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ：10,000～19,999	Ⅲ：5,000～9,999	Ⅳ：～4,999
学生数（人）	Ⅰ：20,000～	11(55%)	3(18%)	0(0%)	0(0%)
	Ⅱ：15,000～19,999	6(30%)	2(12%)	1(5%)	0(0%)
	Ⅲ：10,000～14,999	2(10%)	5(29%)	4(20%)	7(19%)
	Ⅳ：5,000～9,999	1(5%)	7(41%)	12(60%)	14(39%)
	Ⅴ：～5,000	0(0%)	0(0%)	3(15%)	15(42%)

※( )内の数値は図書費各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

（表 7）では明瞭に傾向が出ています。「学生数が多ければ多いほど図書費は高くなる傾向がある」ということが見て取れます。したがって、（表 2）と（表 3）の結果が類似していたのもこの結果から納得することが出来るかと思います。

次に、（表 8）「学生数と学生一人当たりの図書費の関係」について考察します。

（表 8）「学生数と学生一人当たりの図書費の関係」

		学生一人当たり図書費（円）				
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ：15,000～19,999	Ⅲ：10,000～14,999	Ⅳ：5,000～9,999	Ⅴ：～4,999
学生数（人）	Ⅰ：20,000～	1(25%)	1(8%)	3(16%)	9(24%)	0(0%)
	Ⅱ：15,000～19,999	0(0%)	2(15%)	4(21%)	2(5%)	1(5%)
	Ⅲ：10,000～14,999	0(0%)	2(15%)	4(21%)	5(13%)	7(37%)
	Ⅳ：5,000～9,999	2(50%)	4(31%)	6(32%)	14(37%)	8(42%)
	Ⅴ：～5,000	1(25%)	4(31%)	2(11%)	8(21%)	3(16%)

※( )内の数値は学生一人当たり図書費各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

（表 8）は、今までの表と異なり、微妙ではありますが学生数が多くなるにつれ、学生一人当たりの図書費が減少する傾向にあります。学生数のⅠ級を見ると、学生一人当たり図書費のⅠ級に属する 1 大学を除いて、Ⅱ級からⅣ級に掛けて漸増しています。また、学生一人当たりの図書費のⅠ級を見ると、学生数Ⅳ級以下の大学が 7 割以上を占めており、学生一人当たりの図書費のⅡ級も同様に、学生数Ⅳ級以下の大学が 6 割以上を占めています。さらに、学生数のⅣ級とⅤ級を見ると、それぞれ学生一人当たりの図書費がⅠ級、Ⅱ級の（）内の数値が最大となっています。これらのことから、非常にわずかではありますが「学生数が多くなると、学生一人当たりの図書費は減る傾向にある」ということが出来ます。

この結果と、（表 7）の「学生数が多ければ多いほど図書費は高くなる傾向がある」ということを合わせて考えると、（表 4）の「学生一人当たりの図書費が多ければ、蔵書の質は上がるとは必ずしも言えない」というのも納得できます。

4.2. 雑誌の評価結果

次に、雑誌について見ていきます。雑誌所蔵数の級分類は（表 9）の通りです。雑誌所蔵数の最大値は 29、中央値は 25、最低値は 19 です。

（表 9）

級	雑誌所蔵数	大学数（割合）
Ⅰ	26～	35(37%)
Ⅱ	21～25	47(49%)
Ⅲ	～20	13(14%)

※( )内の数値は小数点以下四捨五入

最初に（表 10）「雑誌の所蔵数と学生数の関係」について考察します。

（表 10）「雑誌の所蔵数と学生数の関係」

		学生数（人）				
		Ⅰ：20,000～	Ⅱ：15,000～19,999	Ⅲ：10,000～14,999	Ⅳ：5,000～9,999	Ⅴ：～4,999
所蔵数	Ⅰ：26～	10(59%)	6(60%)	6(35%)	10(31%)	3(17%)
	Ⅱ：21～25	6(35%)	4(40%)	7(41%)	18(56%)	11(61%)
	Ⅲ：～20	1(6%)	0(0%)	4(24%)	4(13%)	4(22%)

※( )内の数値は学生数各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

所蔵数のⅠ級が、学生数のⅤ級からⅠ級に向かって漸増の傾向にあり、所蔵数のⅡ級に関しては、学生数のⅠ級からⅤ級に向かって漸増の傾向にあります。さらに、中央値を含む所蔵数Ⅱ級以上では学生数Ⅰ級とⅡ級の割合が高く、逆に所蔵数Ⅲ級では学生数Ⅲ級以下の割合が高くなっています。したがって、図書同様に「学生数が多いほど蔵書の質は高い傾向にある。ただし、関係は弱い」と言うことができます。

次は、(表 11)「雑誌所蔵数と雑誌種数の関係」についてです。

(表 11)「雑誌所蔵数と雑誌種数の関係」

		雑誌種数（種）				
		Ⅰ：30,000～	Ⅱ：20,000～29,999	Ⅲ：10,000～19,999	Ⅳ：5,000～9,999	Ⅴ：～4,999
雑誌所蔵数	Ⅰ：26～	9(64%)	6(46%)	12(41%)	4(20%)	4(21%)
	Ⅱ：21～25	4(29%)	6(46%)	12(41%)	14(70%)	11(58%)
	Ⅲ：～20	1(7%)	1(8%)	5(17%)	2(10%)	4(21%)

※( )内の数値は雑誌種数各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

雑誌所蔵数Ⅰ級を見ると、雑誌種数が多いほど割合が高いことが分かります。しかし、雑誌所蔵数Ⅲ級を見ると、雑誌種数（種）のⅢ級がⅣ級より高くなっているため、雑誌種数が少ないほど割合が高いとはいえません。したがって、「雑誌種数が多いほど、蔵書の質が高まるとは一概にいえない」ということが出来ます。つまり、闇雲に種数を増やすことでは雑誌における蔵書の質は高まらない、雑誌における蔵書の質に関してはどれだけコアとなる雑誌を選定できるかによる部分が大きいと推測します。雑誌は、インパクトファクター等の指標もあり、図書より比較的選定がしやすく、また選定が質につながりやすいという意味では、どの大学においても雑誌蔵書の評価は行うメリットがある作業といえるかと思います。

(表 12)「図書所蔵数と雑誌所蔵数の関係」

		雑誌所蔵数		
		Ⅰ:26～	Ⅱ：21～25	Ⅲ：～20
図書所蔵数	Ⅰ：70～84	7(29%)	2(8%)	1(13%)
	Ⅱ：55～69	5(21%)	5(19%)	0(0%)
	Ⅲ：40～54	10(42%)	14(54%)	3(38%)
	Ⅳ：25～39	2(8%)	5(19%)	4(50%)

※( )内の数値は雑誌所蔵数各級中の大学の割合（小数点以下四捨五入）

図書所蔵数Ⅱ級以上の割合は、雑誌所蔵数Ⅰ級の場合 50%、雑誌所蔵数Ⅱ級の場合 27%、

雑誌所蔵数Ⅲ級の場合 13%となり、雑誌蔵書の質が高いほど図書蔵書の質が高い傾向にあります。しかし、雑誌所蔵数のⅠ級を見ると、図書所蔵数Ⅲ級の割合が最も多くなっていることが分かります。以上のことから、「雑誌蔵書の質が高ければ、図書蔵書の質が高い傾向にあるが、雑誌蔵書の質が低くても質の高い図書蔵書を構築することは十分に可能」といえるかと思います。

5. まとめ

5.1.方法の考察

１）主題範囲の設定について

本報告では、「経営学の組織論分野において、学部学生が必要とする図書を所蔵しているかを調査すること」を目的としてチェックリストを作成しました。本報告のように限定された目的の中では、一定の有効性を持つリストであると考えています。しかし、蔵書全体を評価するためには、複数のチェックリストを使用するか、単一のチェックリストを使用する場合であってもその内部を主題で分類して活用するなどの工夫が必要となると考えます。たとえば、500 冊の経営学関係の基本書のチェックリストを作成し、その中で組織論、戦略論、マーケティング、人的資源論等に細分化し、細分化された分野ごとに評価・分析を加えることなどが考えられます。

２）基本資料の設定について

チェックリストの準備には2種類の方法があり、既存の書誌類を使用する方法、それから本報告で行った自分達で作成する方法があります。自分達で作成する場合には、チェックリストに含める資料を決定するために参考とする資料（本報告では、基本資料と呼んでいます）の選び方によって、チェックリストは変化します。本報告では、教科書的な、概論的なものを選択しましたが、基本資料に最先端の分野、研究書、論文を選択すれば、「タイムリーな資料」のチェックリストの作成が可能と推測します。

また、基本文献の出版年は十分に考慮する必要があります。できる限り最新のものを選択するのが良いと考えます。なぜなら、それだけチェックリストに含められる資料が広がり、結果としてより広範で偏りのないリストを作成することにつながるからです。

３）チェックリストの作成について

３－１）基本資料の参考文献、引用文献の記述形式の違いについて

資料によっては、章ごとに執筆者が異なり、参考文献も章ごとに独立しているため、1つの基本資料から同一の資料が複数回抽出されることもありました。非常に細かい話ですが、これを出現回数としてカウントするかどうかは、意見が分かれるところだと思われます。今回は組織論概論をテーマとして基本文献を選択しており、1冊の基本資料に複数回含まれ

る資料は組織論の中の複数のテーマと関連を持つ、つまり「組織論においては、より重要性が高い」と解釈し、カウントすることとしました。

また、参考文献の表示法として、講論集の中の1つの章を抜粋しているものがありました。これは、一冊全体を参考としているわけではないので、その当該1章をリスト化すべきか迷いましたが、雑誌同様、タイトル単位の抜粋としました。蔵書評価は、蔵書構築のために行うものであり、蔵書構築は現状では販売されるパッケージ単位で行われる（章単位では購入できない）ことがほとんどのため、タイトル単位での抜粋は妥当であると考えます。

３−２）総合目録の所蔵情報とローカルの所蔵とのタイムラグについて

総合目録による所蔵調査には、実際には所蔵しているがアップロードしていないため、未所蔵と判断される資料が含まれる可能性があります。これは各大学のNIIへのアップロードの頻度や、その方針によって左右されることから起因しています。実際、NIIの『書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告』でも「ローカル目録にのみ書誌を作成するといった動きも一部であるが生じている」旨が報告されていますが、この研究では時間的制約から、ローカルとNIIとの所蔵率の比較行ない、それがどの程度のものであるかといった調査は行わないこととしました。

３−３）同一タイトルで別出版者発行の資料について

一般的に古典や良書と呼ばれるような、長い年月を経ても一定の価値を失わない資料の中には、同一資料が異なった出版者によって発行されることがよくあります。この出版者よる区別に意味があるでしょうか。選書実務の観点から言えば、区別する意味が無いと考えます。一般的に選書の際は、出版者が異なっていても内容が同じである資料を所蔵しているならば、購入は控えられるからです。したがって、今回の調査に用いた書誌IDによる蔵書評価よりは、手間がかかるが、タイトルと著者名による検索にした方がより各大学の所蔵状況の実状を反映できたと考えられます。

３−４）チェックリストに含まれる資料の重要性について

チェックリストを作成するために、基本資料5冊を参考にしましたが、図書のチェックリストに関しては、基本資料の冊数が不足していると感じました。最終的に取りまとめた際、出現回数が2回のものがとても多く、回数に明確な差が認められなかったからです。雑誌はそれぞれのタイトル間で、基本資料に出現した論文数の差がある程度明確になったため、5冊でも十分と考えます。

３−５）チェックリスト作成の作業量について

３−１）～３−４）のように、参考文献、引用文献の記述形式の違い、総合目録の所蔵情報のNIIとローカルとのタイムラグ、同一タイトルで別出版者発行の資料の扱いなど細かい

部分でルールを決める必要があります。また、基本文献から、参考文献を一つ一つ抽出し、出現回数によってソートし、リスト化を行うのは、大変な作業量をともない、時間がかかります。おそらく、蔵書評価が行われない理由もこの作業量にあると推測します。作業量に見合った示唆に富んだ知見が得られるかといえば、必ずしもそうとはいえません。一言でいうと、「コストパフォーマンスが悪い」ということに尽きるかと思います。

４）集計・蔵書評価の実行について

４－１）チェックリスト法の考え方について

本報告で使用したチェックリストの作成は、インパクトファクターと同様「参考文献として示された文献には一定の価値があり、その回数が多ければそれだけ価値がある」という考え方に基づいています。したがって、チェックリストは「良書リスト」「理想的な資料のリスト」とも捉えることができますが、私達は一種の「全体集合から一定の方針の元に抽出したデータの集合（サンプリングデータ）」と捉えています。このように捉えることで、「リスト記載の資料（のみ）を所蔵していれば蔵書の質が高い」と評価するのではなく、「リスト記載の資料を所蔵しているほど、当該分野の蔵書の質が高いと予想される」と評価することが可能となります。

４−２）集計

本報告では、時間的制約から集計作業にNIIが提供しているWebcatPlusを使用しました。前述の通り、WebcatPlusは必ずしも各大学の正確な所蔵状況を反映しているとはいえませんので、本来であれば各大学のOPACを使用して調査すべきところですが、150近い大学のOPACで図書・雑誌あわせて約200タイトルを一つずつ検索すると、単純に計算しても150×200＝30,000回の検索が必要となります。これを行うのは現実的ではありません。

実務においては、所属大学とその他5大学ほどの比較が出来れば十分かと思いますが、それでも150×5＝750回の検索が必要となります。このほかにも同定作業が伴いますので、やはり相当な作業量になります。したがって実務に応用するためには、なんらかの工夫が必要と考えられます。

現在のコンピュータ技術を用いれば、より少ない労力で、有用な知見を得ることが可能と思われますが、実際にはいくつかの技術的問題があるようです。以下は、国立国会図書館発行の『図書館調査研究リポート No.7　蔵書評価に関する調査研究』からの抜粋です。

しかしながら、「完全に正確な」書誌同定アルゴリズムはまだなく、おそらくこの先も、開発されることはないように思われる。もちろん、かなりの精度を持つアルゴリズムがこれから先、提案される可能性は否定できないが、現時点では、十分な正確性を持ち、なおかつ実装の容易なアルゴリズムは存在しない。さらに、シリーズものに代表される書誌階層の存在や、処理対象となるレコードにおける記述の精粗が問題をいっそう複雑にしてい

る。加えて、洋図書を対象とする場合に、書名等を表現する文字コードや翻字に関しても、十分な注意を払う必要がある」

5.2. 蔵書評価を実施した感想

今回の蔵書評価を通じて、各メンバーの所属大学の蔵書について状況を把握することができました。もちろん、チェックリストにあがった文献について、自館にどのくらい所蔵があるかということも重要ですが、具体的に他の大学と比較をすることができた点がより重要であったように思えます。

「蔵書評価の作業量」については、今回、私たちが行った規模の蔵書評価であっても、かなりの時間と労力を必要としました。実際には、各大学で蔵書評価を日常的に行うことは非常に難しいため、各大学でプロジェクトを組んで行うべきものと考えております。また、可能な限り作業量を減らす何らかの工夫が必要です。

私たちが考えうる一つの方法として、Nacsis-cat データの有効利用によって、蔵書評価に有用な情報を提供することが可能だと考えております。たとえば、アメリカの代表的な書誌ユーティリティである OCLC では、WorldCat Collection Analysis というサービスを提供しており、自館のみが所蔵している資料は何か、また、他機関と重複している所蔵資料の状況などといった情報を提供しています。

以下参考として、OCLC のホームページに記載されている内容を紹介していますので詳細はそちらをご覧いただければと思います。このようなサービスが提供されれば、分担収集や、特色あるコレクションを実現する有用な情報のひとつとなると考えられます。いずれにしろ、NII が所有している情報をそのままにしておくのでなく、蔵書評価に利用できる形で加工することはメリットがあると考えています。

6. 参考

以下では、参考情報として OCLC「WorldCat Collection Analysis」の紹介と、日本における蔵書評価事例の紹介と考察、チェックリスト法の内容が整理された論文の紹介、考察をしたいと思います。

6.1. “OCLC WorldCat Collection Analysis”

6.1.1. “OCLC WorldCat Collection Analysis”の概要

WorldCat Collection Analysis では、自館の蔵書構成を一覧し、WorldCat に参加しているすべての機関（同じ分野の機関や、比較したい機関）の蔵書と比較することができます。また、ILL と貸出統計の調査により自館の蔵書がどれだけ利用されているかを評価することが可能です。さらに、評価結果をエクセルにエクスポートすることができ、表やグラフを作成することも可能です。

これらの機能は、すべて web を通じたサービスとなっており、図書館システムの種別を問いません。また WorldCat 参加機関であれば、機関の別に関係なく分析可能です。

データを用いた蔵書評価・分析では、対象となるデータが現状をどれだけ正確に表しているかがキーとなります。NII 同様、WorldCat においてもローカル所蔵と書誌ユーティリティ上の所蔵には差があると考えられます。OCLC では、WorldCat Collection Analysis 契約時に最新の所蔵状況を反映する作業をおこなうための支援も行っています。

WorldCat Collection Analysis を使用して、得られるメリットにはいくつか考えられます。まず一つ目は、既存のデータを使用してシステム的に評価を行えるため、評価にかかる手間を軽減できるということです。今回の報告では、蔵書評価にかかる労力がその実行の大きな障害となっていることが明らかとなりましたので、その軽減は非常に大きなメリットといえます。また、他大学図書館と比較できるということは、自館の蔵書の特長を知る上で非常に有用ですし、図書館の外部者に対しては図書館の有効性を分かりやすい形で示す材料になると考えられます。事前に行う最新の所蔵状況の反映作業は、正確な評価の基礎となるだけでなく、ILL 効率の上昇ももたらすので、書誌ユーティリティ側にとってもメリットがあります。この蔵書評価サービスは、各機関の蔵書評価を支援するだけでなく、書誌ユーティリティの有用性向上をももたらす、非常に合理的なサービスであると考えます。

6.1.2. “WorldCat Collection Analysis”の蔵書分析の手順と内容について

“WorldCat Collection Analysis”の蔵書分析の手順と内容について、OCLC のホームページ上で、実際の画面や分析例など用いたデモンストレーデョンを見ることができるので、簡単に紹介したいと思います。このデモンストレーションでは、ノーザーンイリノイ大学図書館の蔵書分析をモデルとしています。

（手順）

1.ID とパスワードを入力して、First Search のスタッフのインターフェイスにログイン

2.契約者に用意されている“Collection Analysis”のタブをクリック

3.“Collection Analysis”のメインメニューが表示される

4.分析したいメニューを選択する

4-A. My Library

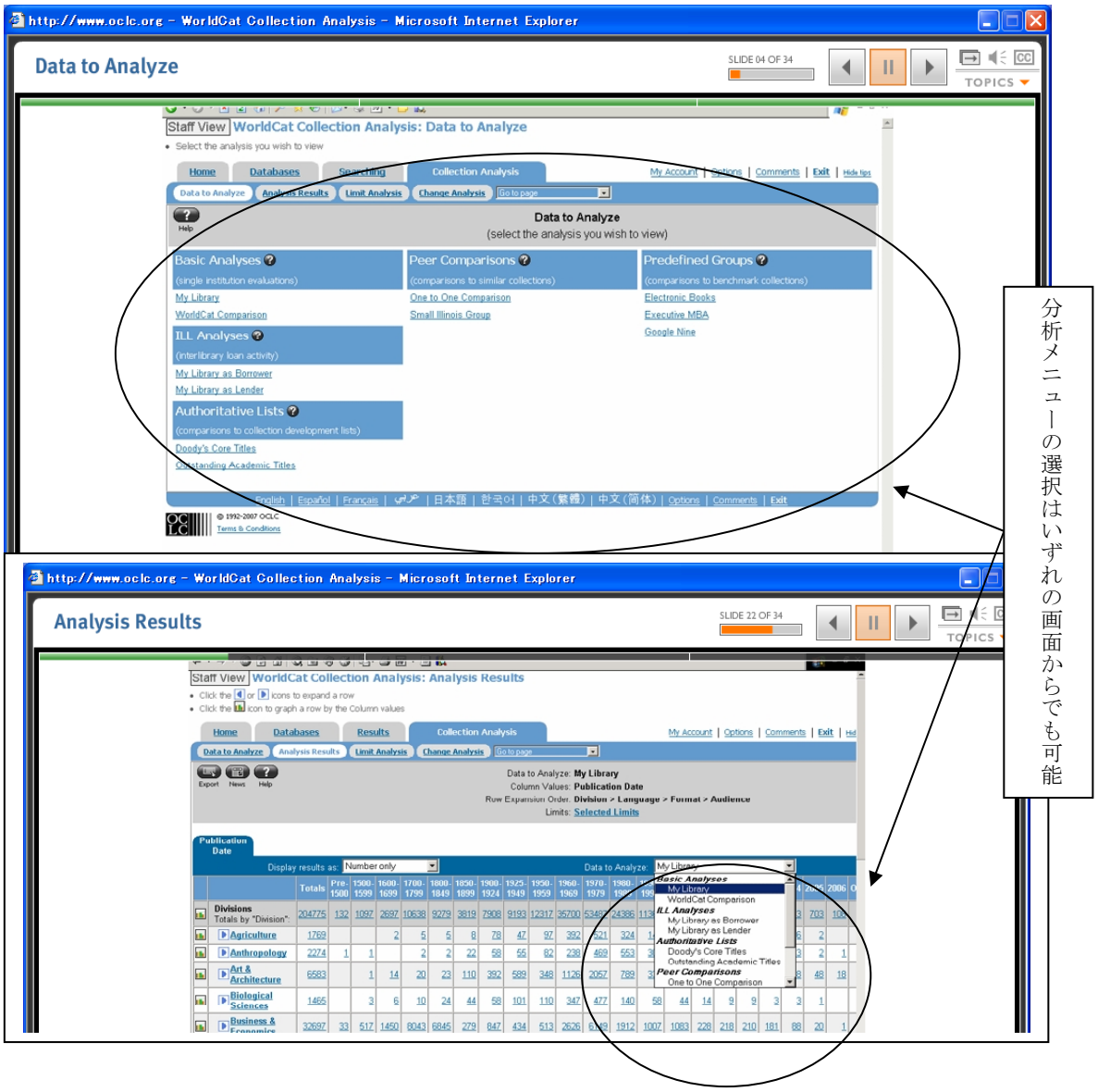
4-B. WorldCat Comparison

4-C. Peer Comparisons

4-D. ILL Analysis

蔵書分析したいメニューは、下記（図１）の通り、メインメニューの”Data to Analyze”からも選択可能であるし、分析結果表示後は表右上に用意されているプルダウンメニュー”Data to Analyze”からも選択可能です。以下、メニューごとに紹介します。

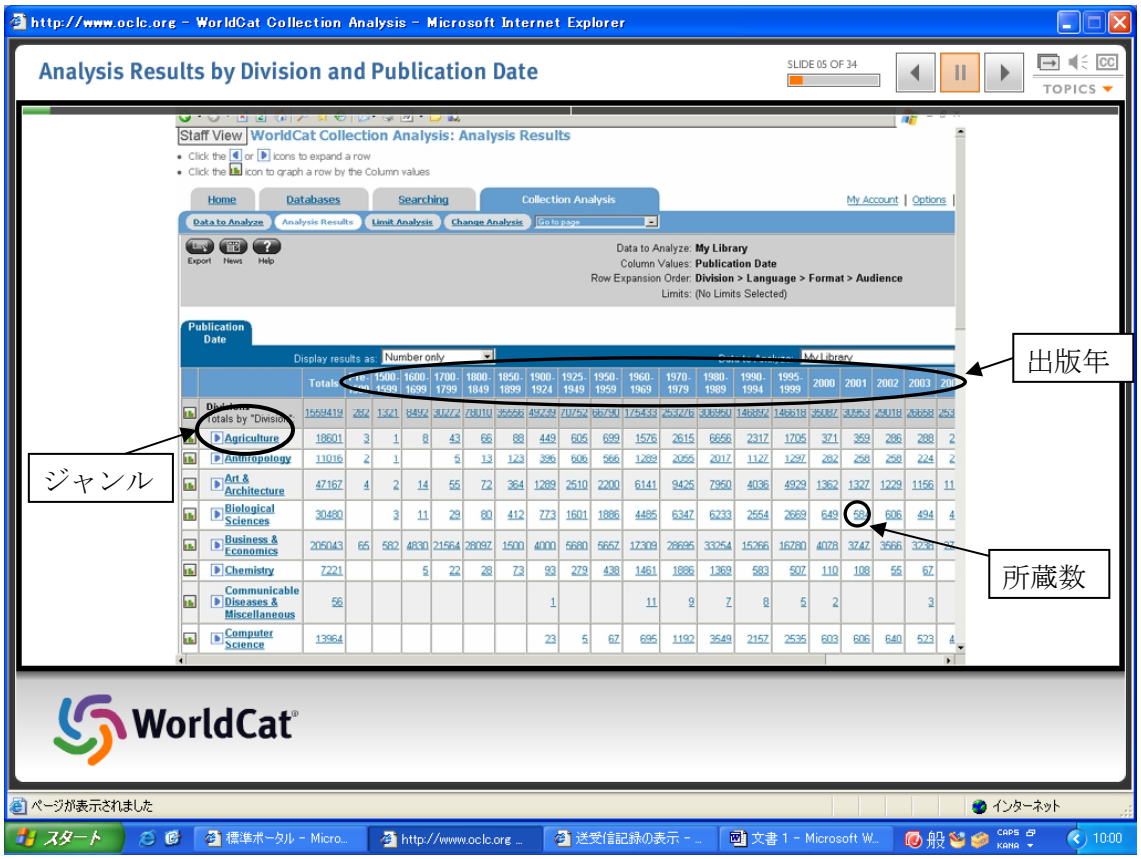
（図 1）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



4-A-1. My Library

My Library では、WorldCat に登録されたデータを用いた自館の蔵書構成についての、分析結果データを得ることができます。

（図 2）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



4-A-1.分析結果

（図 2）の画面は、My Library の分析結果です。

【ジャンル】

左端の項目“Division”は、「Agriculture（農業）」、「Anthropology（人類学）」のように大きく分類されたジャンルですが、この項目をクリックすることで、さらに細かい主題やカテゴリーに分類できます。Agriculture ＞ Agriculture & Fisheries ＞ Aquaculture & Fishers のように、自館の蔵書を、大きなジャンルで分析したり、さらに細かいカテゴリーに焦点をあてて分析したりすることができます。

【出版年】

出版年は上方に列挙されており、1500 年以前から現在までが含まれています。

【所蔵数】

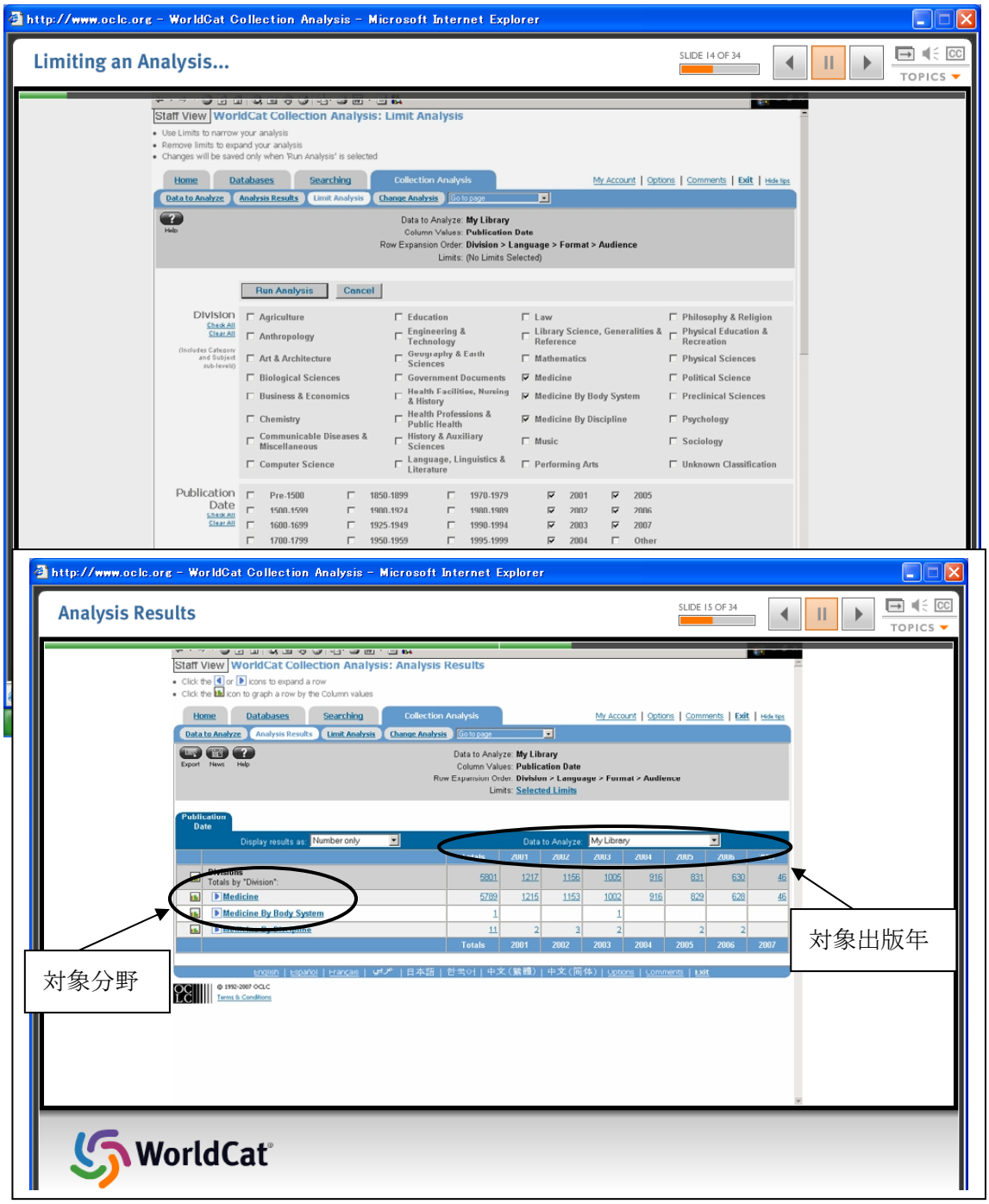
セル内の数字は、WorldCat に登録されている自館のデータのうち、その主題×出版年の資料所蔵数です。 セルの数字をクリックすると、その主題と出版年にマッチしたタイトルや著者等の書誌データと WorldCat 内の所蔵状況が表示される。ここで表示された書

誌情報等は、エクスポートしたり、e - mail に送信したり、印刷することができます。
　また、セル内の数字については、「数字のみ」「%のみ」「数字&%」のいずれかを表示することができます。

4-A-2. Limit Analysis と Change Analysis

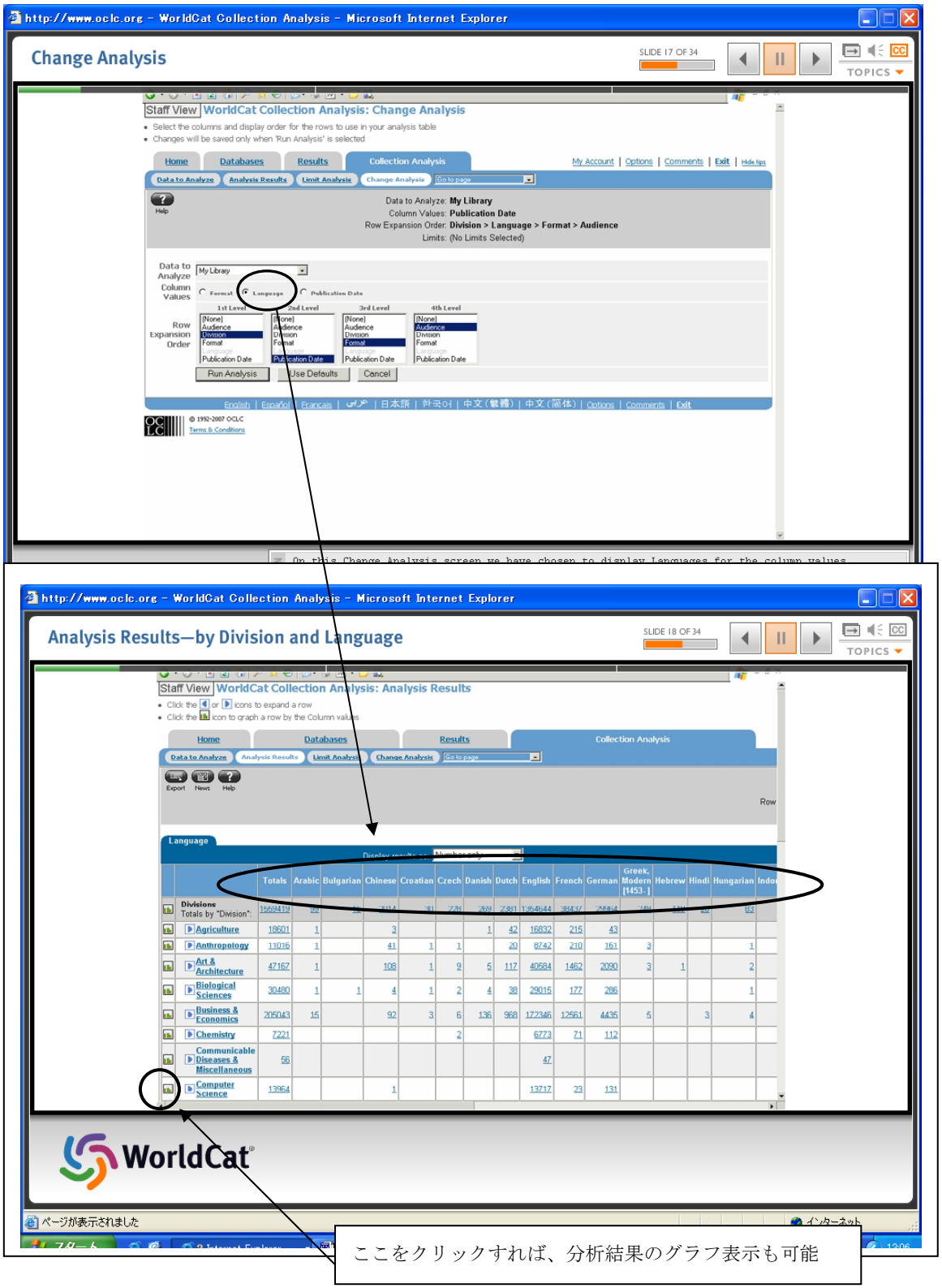
異なった視点から自館の蔵書構成を見られるよう、分析のための条件を限定したり変更したりすることができます。
　下記の（図 3）は、Limit Analysis の条件選択画面とその検索結果です。上の設定画面上で、対象分野を"Medicine", "Medicine By Body System", "Medicine By Discipline"とし、対象出版年を 2001 年～2007 年と選択した結果が、下の画面となります。分野、出版年の他にも、言語、資料種別等によっても分析条件を限定することができます。

（図 3）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



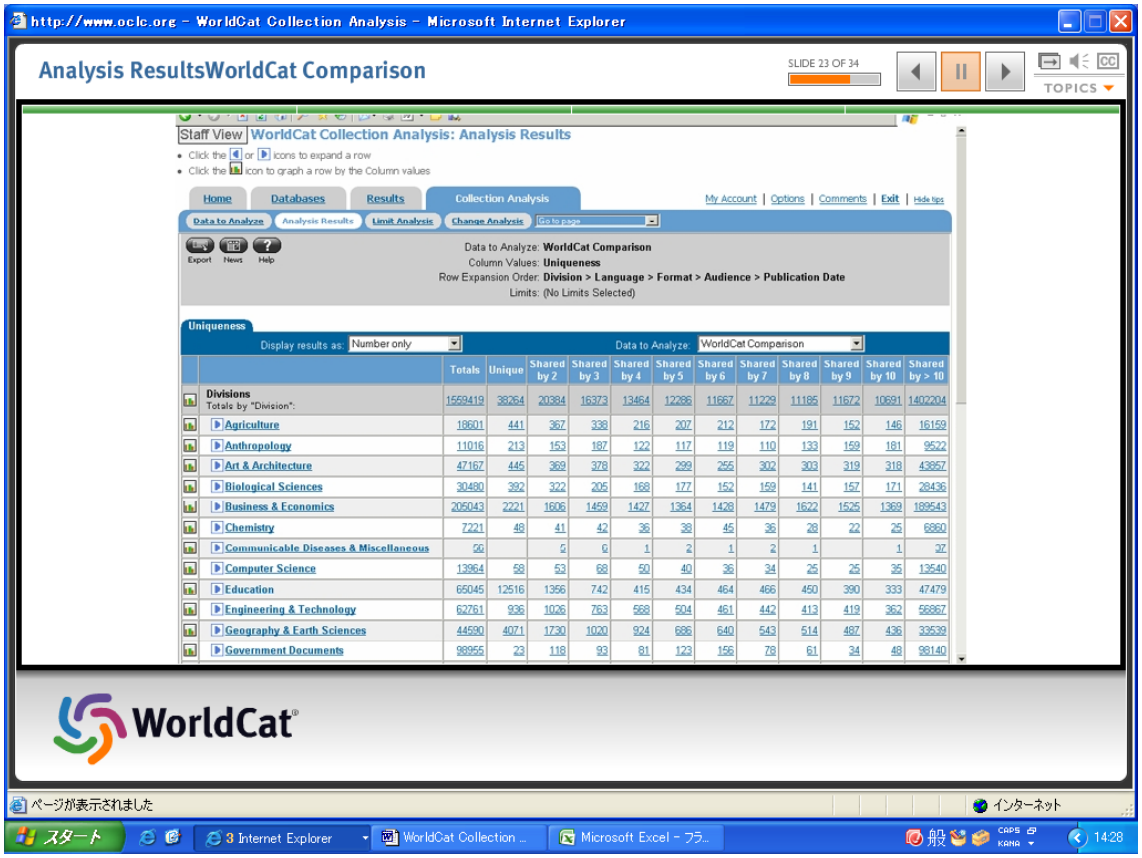
Change Analysis の選択画面と検索結果画面は（図 4）のとおりです。分析結果の項目を「出版年」から「言語」に設定変更したり、データ並び順の優先順位を設定したりすることができます。また、分析結果はグラフ表示も可能です。

（図 4）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



4-B. WorldCat Comparison

（図 5）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



“WorldCat Comparison では、自館の蔵書と WorldCat 内の全所蔵データとを比較することができます。（図 5）の分析結果のとおり、各ジャンルにおいて自館のみが所蔵している資料の状況や他館との重複状況についての情報が得られます。

“Unique”は WorldCat 内においては自館しか所蔵していない資料数を表し、”Shared by 2”は自館の他に 1 機関のみが所蔵している資料数を表し、”Shared by 10”は、自館も含めて 10 機関以上が所蔵している資料数を表します。セル内の数字をクリックすれば、書誌レコードも見ることができます。このデータは、保存すべき資料やデジタル化すべき資料、そして除籍可能な資料を決定するために有効です。

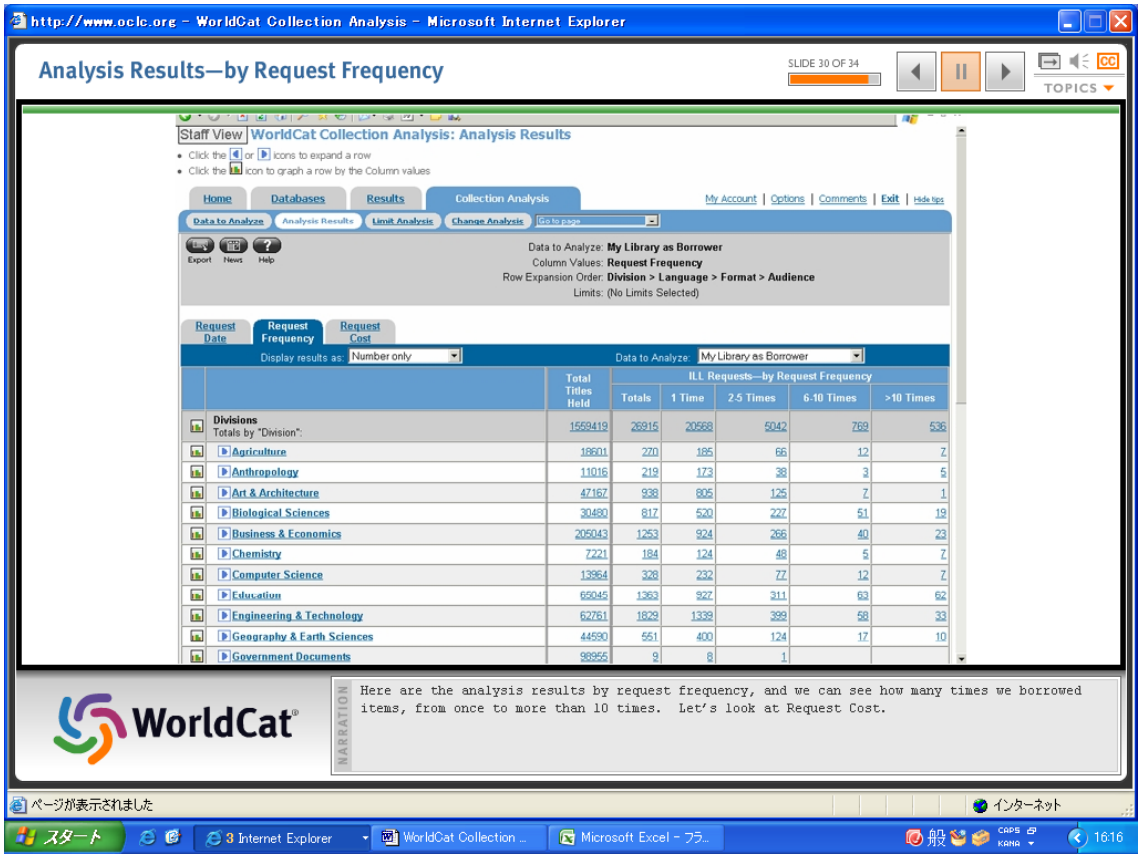
4-C. Peer Comparisons

1 対 1 での蔵書比較も含めて、自館と他機関との蔵書の比較ができます。2～5 機関から構成された仲間の図書館グループ内での比較が可能です。デモンストレーションでは、「small Illinois グループ」 とノーザーンイリノイ大学の蔵書を比較分析しています。

4-D. ILL Analysis

ILL Analysis では、ILL における貸出と借受の状況がわかります。（図 6）は借受の分析結果画面ですが、分野と年度毎の借受状況に加えて、借受頻度が多い資料が分析結果からわかるようになっています。さらに借受にかかるコストも表示できます。

（図 6）（画像は、http://www.oclc.org/collectionanalysis/ 中の[View the online Flash demo]から引用）



以上、"Collection Analysis"の簡単な手順と内容を紹介しましたが、WorldCat Collection Analysis は、自館の蔵書分析に加えて他機関の蔵書との比較が容易にできること、ILL の貸借の状況についても具体的に分析できることが大きな魅力です。

日本国内の大学図書館間において、いくつかのコンソーシアムが結成され、ILL システムが導入されてから 10 年以上経ちます、いずれについても成熟しているとは言い難い状況です。加盟館それぞれが個別に資料収集を進め、ILL やコンソーシアムは未所蔵資料の相互利用に留まっています。各館それぞれの学部構成、予算、その歴史等の個別の事情があることは当然ですが、だからこそ計画的な分担収集を進めるべきではないでしょうか。増加し続ける資料による書庫狭隘化問題、限られた資料費の有効活用を考えると、大学図

書館それぞれの蔵書構成において強いジャンル、弱いジャンルを確認し、他館との分担収集を真剣に考える時が来ていることは明らかです。

日本国内においても、WorldCat Collection Analysis のような蔵書分析データベースが近い将来提供されることを期待したいと思います。

6.1.3. OCLC WorldCat Collection Analysis　活用事例

１）William Woods Universityの事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/12111FWilliam_Woods_University.pdf accessed 2009/12/20)

William Woods Universityは、1870年にミズーリ州のフルトンで創設された大学で、学生数は2900名、蔵書冊数は90,000冊、ミズーリ州の学術図書館の横断検索システム、MOBIUSの設立時からのメンバーです。

William Woods University図書館では、単に現在の蔵書冊数を示すだけではなく、他大学の図書館と比較した上で、自分達の図書館に本当に必要なものを明らかにしたいと考えており、この要求を満たすサービスとしてOCLCが提供するWorld Cat Collection Analysisを選びました。

導入して印象的だったのは、同類機関との比較から、評価、収集計画立案、購入までをたった3ヶ月という短期間で行えたということ、操作が簡単だということ、そこから得た評価・分析は、資金計画のために極めて有効とのことです。

William Woods University図書館を日本に置き換えて考えると、一人の職員がいくつかの担当を掛け持ちして業務を行っている大学図書館をイメージできるかと思います。WorldCat Collection Analysisを使用した評価も掛け持ちの仕事の内のひとつとして行われることを考えると、3ヶ月で評価から購入までを行えたことはかなりの省力化となっていると考えられます。今回の私達の経験では、チェックリストを作成するだけで約50時間かかっています。そこから集計、評価を行いましたので、さらに多くの労力がかかりました。それが、6.1.2.で見たように簡単に行えるのは、非常に大きなメリットと考えます。

また、WorldCat Collection Analysisで得られる評価は、他大学蔵書との比較に過ぎず、自館の蔵書がどれだけ利用者に利用されているか、学説史上重要な著作を所蔵しているか、大学が標榜する目標との関連度合いはどの程度かなどといった観点からの評価は出来ません。したがって、理想を言えば不足部分を別の評価で補完することが必要です。

２）The University of West Floridaの事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212111usc_T_university_west_florida.pdf accessed 2009/12/20)

The University of West Floridaは、State University System of Floridaのメンバーで、学生数は約9,500人、美術、科学、ビジネス等の分野で学位を授与し、専門的研究も行って

います。図書館の蔵書数は、約752,000冊で、連邦政府とフロリダ州が発行した出版物のための寄託図書館でもあります。

The University of West Floridaは、資料の購買力増加と蔵書の協調利用を進めるコンソーシアムに参加していますが、さらなる蔵書の協調利用を課題としていました。そのようなときにコンソーシアム内の活動でWorldCat Collection Analysisを知り、それから検討を重ね、導入を決定しました。

1）のWilliam Wodds University同様に、比較をすることで自館蔵書の強み弱みを把握できただけでなく、そこから得た評価、分析を大学の認証評価へも活用できたとのことです。また、簡単に実行できたことも大きな特長であったとのことです。

ここでも、簡単に蔵書評価を行えることが特長として挙げられています。蔵書評価に限らず、評価には多大な労力がかかり、「評価疲れ」という言葉もあるほど、評価にかかる時間と手間は大きなものがあります。したがって、評価を考える際、いかに簡単に行えるか、いかに手間を少なく実行できるかという視点はとても重要です。

３）Virginia Techの事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212111usc_N_virginia_tech.pdf
accessed 2009/12/20)

Virginia Techは、ヴァージニア州の高等教育機関で最大の学生数をもつ大学です。元々1872年に政府の援助を受けた大学として創設され、今では約25,000人の学生が在籍しています。

Virginia Tech図書館は、中央図書館と3つの専門図書館で構成され、220万冊以上の蔵書があります。蔵書数が多いため、コレクションの中に何があるか、大学のミッションとどの程度の関連性をもっているかを理解することは困難でした。

Virginia Tech図書館は、ASERLを通じて団体購入の一部としてWorldCat Collection Analysisを購入しました。ASERL(=the Association of Southeastern Research Libraries)は、国内で最大の地域図書館コンソーシアムで、このコンソーシアムに参加していたことによって、即座に他大学との比較調査を行うことができました。

似通った大学を選び、これらの大学の図書館と蔵書を比較することで、強み弱みを知ることができました。調査の結果、ほとんどの場合、優先順位が高い分野は強く、優先順位が低い分野が弱いということが分かったとのことです。

この事例でも、比較による強み、弱みの把握が効果として挙げられています。単なる比較ではありますが、数値化して比較することはつまりランキング化することに他ならず、データとして大いに説得力をもつと考えます。ただし、その説得力ゆえに、あくまで大学間の比較であり学説史上の重要な著作を所蔵しているかなどの質を測ることはできないということを忘れないようにし、この比較分析を過信することは、避ける必要があると考えます

4)Logan Public Library の事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212426usc_D_logan_public_library_NEW.pdf accessed 2009/12/20)

Logan Public Library では、1999 年当時、20 年以上にわたり蔵書構築を担当していた librarian が退職し、ノウハウが失われていました。しかし、新しい担当者が蔵書構築に関するプログラムに参加した際に、WorldCat Collection Analysis を知る機会を得ました。

そして、2005 年の開始当初から WorldCat Collection Analysis を利用し始め、蔵書構築に役立てました。WorldCat Collection Analysis 導入のための予算の獲得の際には、WorldCat Collection Analysis と OCLC の WorldCat のデータベースとの連携は大きな説得材料となりました。また、WorldCat Collection Analysis は簡単に使うことができ、スピーディーでユーザフレンドリーです。他の図書館システムとの連携も可能です。

予算獲得へ向け、同規模の図書館との比較により自館の蔵書の優れた点と弱い点を知ることができ、しかも自館の蔵書全体について、わずか数ページのレポートで把握することができるようになりました。さらに、市議会への資金の要求が容易に行えるようになりました。継続的な使用によって、コレクションの経年変化を把握することも可能にしていこうと試みているとのことです。。

先の 1) ～3) の事例とこの事例を合わせて考えると、WorldCat Collection Analysis は、館種や図書館の規模に関わらず、有益である様子が窺えます。

5)Emmanuel d'Alzon Library の事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212111usc_U_wca_assumption_college.pdf accessed 2009/12/20)

Assumption College は、1904 年に発足した聖職者養成のための大学で、現在もカソリックの伝統があるものの、カリキュラムや授与する学位の種類は増加し続けてきています。

「図書館のコレクションは変化してきた」と一概に言うのは簡単ですが、どのように蔵書構築を管理するか決めることや所蔵状況を把握すること、必要な資料・不要な資料を理解することは容易ではありません。

WorldCat Collection Analysis を使用する前は、リポートを作成することができる図書館システムは存在しましたが、簡単に操作やデータの加工ができるものはありませんでした。

WorldCat Collection Analysis を使うことで、概況を把握することや、データの計算、グラフの作成が容易に行えるようになりました。

Assumption College では、WorldCat Collection Analysis を使い、「自館の蔵書がカリキュラムの内容を反映しているか」「フランス語の蔵書について調査する」といった計画を立てています。

また、予算配分の調整や大学の意思決定のためにも利用しています。他の大学やカソリック系の大学との比較も行っています。類似の大学と 1 対 1 で比較をし、優れた点、弱い点を把握し、コレクションの構築に役立てているとのことです。

この事例で述べられている、自館のコレクションについて、「類似館と比較する」といった分析は、日本の現状では不可能であり、実現が強く待たれます。比較するということは必ずしも競い合うだけでなく、分担収集やコンソーシアム活動の発展にもつながり得るものではないでしょうか。

6) Edmonds Community College の事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212111usc_W_wca_edmonds.pdf
accessed 2009/12/20)

Edmonds Community College は Washington 州での主要なコミュニティ・カレッジのひとつであり、9 割以上の学生は 8 マイル以内に住んでいます。昼間、夜間、オンラインと開講しており、大半の学生は 4 年制大学進学のための単位や career program の学位を目的としています。その他にも、高校卒業資格(GED)など、様々な目的を持った学生がかよっています。

Edmonds Community College では、2005 年に WorldCat Collection Analysis を導入したものの、当初はそのことによって、かえって忙しくなってしまいました。しかし、所蔵資料一覧を作成するプロジェクトがあった 2006 年に、状況は一変し、WorldCat Collection Analysis は所蔵資料の一覧を作成するプロジェクトに大いに役立ちました。

全体の一覧を作成する前に、WorldCat の所蔵リストを基にして、小さな部門に分けたリストを作成しました。その後で、所蔵しているにもかかわらず WorldCat に登録をしていない資料を把握し、データベースに登録をしました。部門ごとにこの作業を繰り返し、WorldCat Collection Analysis を図書館で使用するレコードの核としていったそうです。

また、WorldCat Collection Analysis を蔵書の質を上げるためにも使用しました。リポートを容易に作成できるので、学部や講師と話し合う際にも役立っています。WorldCat Collection Analysis を使うことによって、「今、自分たちがどのような位置にいて、今後コレクションをどのようにしていきたいか」について定めることができるようになっているとのことです。

WorldCat Collection Analysis を十全に使用するためには、自館の蔵書を OCLC のデータベースに登録することが必要である点は重要です。本報告でも考察されたように、NACSIS-CAT への未登録資料があるという点では日本の大学図書館と同様の問題が存在することが分かります。

7) Southeastern Oklahoma State University の事例
(http://www.oclc.org/services/brochures/212111usc_J_se_oklahoma_state_university.pd

f
accessed 2009/12/20）

Southeastern Oklahoma State University は、Oklahoma と Texas の境から 15 マイルにある公立の機関です。1909 年の創立当初は Oklahoma の教員を養成するための機関であり、その後、分野は広がってきたものの、現在でも「教員のための大学」と呼ばれています。

開学当初、教職員がひとり 10 冊ずつ寄贈するところから始まったコレクションは、現在では 190,000 冊の図書と定期刊行物となっています。その膨大なコレクションを効果的に分析する手法が必要とされていました。コレクションは一貫性に乏しく、「自分たちが必要だと考えた資料」を入手してきたため、実際の教育をどのくらいサポートしているのか把握することはできていませんでした。

また、学部に対して、図書館にはどのようなコレクションがあるか、分野ごとの出版年や所蔵数といった形で確実に伝えることができないかとも考えていました。自分たちのコレクションを把握し学部に伝えることで、コレクションの強化や大学評価へ貢献ができ、そのことによって、大学全体を前進させていくことにつながっていきます。

2005 年に WorldCat Collection Analysis を知り、学内の補助金を獲得しましたが、WorldCat Collection Analysis がどのように評価に役立つのか説明しやすかったため、資金獲得は容易でした。

導入するとすぐに、認可へ向けて準備していたビジネススクールのために WorldCat Collection Analysis を使用しました。自分たちの蔵書を、他の認可されたビジネススクールと比較し評価しました。また、WorldCat Collection Analysis によってコレクションの偏りを把握することができました。

WorldCat Collection Analysis は、評価や認可に役立てることができ、多くの人の（業務に対する）認識を変えることにつながっているとのことです。

この事例で述べられている「自分たちが必要だと考えた資料」を中心に揃えてきたためにコレクションが一貫性に乏しかったという例は、日本でも多々見られるように思えます。

また、寄付という慣習の有無をはじめ、予算や資金の獲得については日本と異なる側面もあるように思えるが、説得のために「客観的なデータ」を必要とするという点に変わりはありません。

6.2. 国内大学図書館の蔵書評価事例

数少ない国内大学図書館の蔵書評価の事例として、2 つの事例を紹介します。

6.2.1. 筑波大学の事例（「博士論文の引用分析を用いた博士課程大学院生の文献利用についての研究－筑波大学の事例」より）

この論文では、「文献利用調査の方法として引用分析に注目し、筑波大学の課程博士大学

院生が 1999 年度に提出した学位論文に掲載された引用文献を用いて、筑波大学の博士課程大学院生の文献利用調査を行うことにより、彼らが大学図書館にどのようなサービスを求めているかを考察」しています。

引用分析とは、引用文献をもとにさまざまな情報を引き出す研究手法です。この研究では、具体的に次のような方法をとりました。

1) 1999 年度に筑波大学に提出された博士課程論文の 169 論文の中から、16,555 件の引用文献を抽出
    - 記入項目は、「引用文献掲載資料名」「出版年」
2) 同一論文内の同誌かつ同年の重複引用、非公開資料、オンライン資料を除去し、引用文献数を 13,318 件とし、これを要求数と定義
3) 要求数に基づいて分析
    - 引用文献の掲載資料種別
    - 論文あたりの平均要求数
    - 掲載資料の重複タイトル数
    - 引用文献の出版年の遡及年代
4) 要求数に対する供給可能性を調査
    - 資料種別の供給可能率
    - 分野別の供給可能率の特徴
    - 出版年別の供給可能率

3)「要求数に基づいて分析」（引用文献の構成分析）以降の各項目について、論じられている内容を概観していきます。

まず、「引用文献の掲載資料種別」は、主題分野別（人文科学、社会科学、理学、工学、生命科学）に、要求数の何%が図書、雑誌、会議録かを集計しています。次に、「論文あたりの平均要求数」では、学位論文をまとめるまでに必要であった平均的な論文数を分野別に算出しています。また、「掲載資料の重複タイトル数」では、分野別に引用文献掲載資料のタイトル数中にどれだけ複数の論文で引用されたタイトルが含まれているかを集計しています。最後に、「引用文献の出版年の遡及年代」は、要求数の累積が一定の割合（50%、80%）となるまでの遡及年数を集計しています。

次に、4)「要求数に対する供給可能性を調査」の各項目について概観します。

「資料種別の供給可能率」について、まず供給可能率とは引用者が実際にどこから資料を入手したかとは無関係に、大学図書館が当該研究に貢献できる度合いを示しており、図書、雑誌、会議録、研究報告、学位論文等の別に供給可能率を集計しています。また、「分野別の供給可能率の特徴」では主題分野別に、「出版年別の供給可能率」では出版年別に供給可能率を集計しています。

これらの結果として、「①人文・社会科学分野においては論文をまとめる上で必要な文献数が多く、図書がその半数以上を占める、②しかし、人文科学分野の供給可能率が全分野中最も高いのに反して、社会科学的分野の供給可能率は最も低い、③図書については教員に比べて供給可能率が低い、④雑誌のうち最近 15 年以内ものについては教員に比べて供給可能率が高いことが分かった」と述べ、「筑波大学附属図書館の博士課程大学院生に対するサービスにおいては、図書のリクエスト制度、相互利用サービス、学術情報についての教育サービス、レファレンスサービスを拡充する事が必要とされていると考えられる」と分析しています。

この論文で実施された引用分析は、本報告で私達が採用した方法と類似していますが、内容的にはかなり異なっています。私達が作成したチェックリストは、「概論的、入門的な文献に掲載されている参考、引用文献」であり、この論文で作成された引用文献リストは「博士論文に掲載されている引用文献」でるため、私達のチェックリストはいわば名著と呼ばれるような著作のリストであり、この論文の引用文献リストは博士課程の学生が実際に使用した著作のリストになります。もととする文献によって出来上がるリストの持つ意味が異なるので、その選択は非常に重要となります。

また、本報告では行いませんでしたが、同じリストであっても使い方次第でさまざまな調査を行うことが出来ます。この論文では、3）要求数で分析、すなわち引用文献の構成分析を行っていますが、これを私達が作成したチェックリストへ応用すると、著者を軸として集計、分析を加えれば経営学説史上、重要な位置を占める著作者、学説を追えると予想できます。また、出版年で集計、分析を行えば、時代ごとのテーマ、著作、著者を追うこともできると推測します。つまり、チェックリストによる蔵書評価では、チェックリスト自体の分析によって主題知識の獲得も副次的に期待できるといえます。

6.2.2. 東京都立大学附属図書館の事例（チェックリスト法による大学図書館における蔵書評価の一例−東京都立大学附属図書館における初学者向け図書の収集状況−より）

チェックリスト法を用いた大学図書館の蔵書評価事例として、東京都立大学附属図書館の例を紹介します。

全ての図書館職員が、蔵書の重要性は十分に理解しているものの、紹介されるのは海外での事例ばかりで、国内での蔵書評価の事例は多くありません。東京都立大学図書館でも開学以来 50 年、一度も行われたことがなく、「書棚の本や図書館の持つ雰囲気からして問題が山積していることをうかがわせるに十分な状況」であったため、種々ある評価のうち、手始めに蔵書評価を行うこととしました。

チェックリストによる蔵書評価は、私達の方法では、5 つのプロセスを踏みます。すなわち、目的の設定、主題範囲の設定、調査対象の設定、基本資料の設定、チェックリストの作成、集計・蔵書評価の実行です。順に確認していきたいと思います。

東京都立大学附属図書館の調査目的は、明確には記されていません。後述しますが、使用したチェックリストが「AERA MOOK」シリーズであることから、自館蔵書の初学者向け資料の充実度をチェックする、ということができると思います。

主題範囲は、東京都立大学の学部構成と関係の深い分野を対象としています。また調査対象は、本館と学部・学科、非公開学部が所蔵する資料と注文中の資料です。

チェックリストは既存のリストを使用しました。使用したチェックリストは「AERA MOOK」シリーズで、設定した主題範囲に従い、東京都立大学の「学部構成に配慮し、関係の深いシリーズ 12 点」を選定しました。「AERA MOOK」シリーズは、「大学生それも新入生を対象に、これから学ぼうとする当該の学問領域について、対象や方法、学会でのフォーカルポイント、動向等を現役の教授等に語らせ、併せて関連書籍やその講座を開設している大学のリスト等を掲載する内容となっている」シリーズです。「個人が勉強する際の手掛かりとなるような推薦図書であるため、例えばデータブック、辞書、事典、資料などが含まれていない事もあり、図書館の評価基準としてはベストとはいえない」という一面もあります。言語は和書のみで、新書や文庫が多く含まれているのが特徴です。

集計には、OPAC を利用し、本館と学部、非公開学部、注文中のものも所蔵と見なして、集計されました。結果は、掲載点数 833 点のうち、484 点、58.1%の所蔵率でした。後発の学科である心理学科や社会福祉学科の所蔵率の低さが目立った一方、社会学や政治経済といった分野では、70%台の所蔵率でした。附属図書館としては、限りなく 100%に近い 90%台が期待水準と考えているため、現状はやはり低いと言わざるを得ないとのことでした。

この低い所蔵率は、教員推薦図書や希望図書制度の応募が少なく、有効に機能していないこと、つまり教員の協力を十分に得られていないこと、「そのためのコミュニケーションを図り、その意図を汲み、蔵書構成に反映させる努力」が不足していたことに起因するのではないかと結論づけられています。

この事例のように、既存のリストを使用してチェックリスト法を行うことはとても有効な省力化の手段だと考えます。特に複数主題のチェックリストを必要とする場合は、この方法を採用する以外に、日常業務と並行して行う方法はないと考えます。

6.3. チェックリスト法の総括（チェックリストによる公共図書館蔵書分析評価法より）

ここでは、資料選択論において日本を代表する一人である河井弘が 1971 年に発表した論文、当時のチェックリスト法について詳細かつ体系的に論じたものがあるので、チェックリスト法を詳しく知る意味でその概要を確認したいと思います。

河井によるとチェックリスト法は、次の 6 つのプロセスから成り立ちます。

1. 調査目的の決定

2. 調査対象の決定
3. 評価用具チェックリストの選定・作成
4. チェッキング
5. 集計
6. 分析評価
7.
以下、各プロセスの要点を追っていきます。

1. 調査目的の決定

調査の目的は大きく 2 つに分かれます。1 つが蔵書構成自体の構造・性格を分析評価する調査、もう 1 つが図書館の諸機能、諸設備、その他の諸条件との関係を考察する調査です。これを表化すると（表 13）のようになります。

（表 13）

蔵書構成自体の構造・性格分析	・蔵書の持つ主題的特徴は何か ・蔵書の水準はどの程度か ・他館と比較し優れているか ・他館との主題分担状況はどうか ・特定の分野に変更していないか　等
諸条件との関係考察	・レファレンス業務　・開架、閉架といった閲覧方式 ・分類　・目録 ・利用状況　・顕在的・潜在的要求 ・地域社会（人口、産業など）　・図書館費・図書費 ・職員構成　・学生構成

（表 13）の通り、調査の目的は様々に設定されますが、最終的には蔵書構成の質的状況を調べ、今後の蔵書構築の指針を定め、図書館のサービス機能を向上させることが目的となります。本報告では、所蔵数と図書費、学生数、蔵書冊数との相関を調査したので、諸条件との関係考察を行う評価だったといえます。

2. 調査対象の決定

調査対象は、大きく調査対象館の数に分けることができます。1 館調査の場合、蔵書の目的達成度の評価、蔵書とその他諸条件との関係分析、分類別所蔵率調査等が行われ、2 館以上の調査の場合は、1 館調査の単純な拡大による比較調査、重複所蔵率比較調査、所蔵主題分析や比較調査等が行われます。

2 館以上の調査を行う場合は、それらは独立した図書館であるか、あるシステムに属す

る図書館群であるかなどによって、調査分析方法は使い分けなければなりません。本報告では、2 館以上の独立した図書館を調査しました。

3. 評価用具チェックリストの選定・作成

チェックリスト法においては、どのようなチェックリストを使用するかは、調査の正否を左右する重大な問題です。カーノフスキーは、評価用具としてのチェックリストに求められる一般的条件として、妥当性、信頼性、実用性を挙げています。

（表 14）

妥当性（validity）	チェックした結果が調査目的をどの程度満たすか
信頼性（reliability）	調査の結果得られた蔵書構成の程度や性格が忠実に実際の蔵書構成を表しているか
実用性（practicability）	調査者に与えられた時間、人員、経費など実施可能な範囲内に、タイトル数を限定しているか

信頼性を高めるためには、リストの所収タイトルを増やせば良いが、実用性は落ちます。リスト作成、選定者は、この 2 条件のバランスを考慮し、タイトル数を決定します。

また、チェックリスト法においては、調査目的、調査対象に応じてチェックリストを作成する方法と、既存の各種図書リストから目的、対象に適していると考えられるものを選定して使用する方法があります。

また、蔵書全体を分析評価するか、蔵書の限られた部分を評価するかによって使用するリストの種類も変化します。ただ、1 種類のリストを使用したとしてもその内部分類を効果的に利用すれば、多種類のリストを使用したのと同様の効果が得られるので、大事なことは、使用するリストがどれだけ多くの観点から蔵書を分析し、立体的に捉えて評価しうる条件を備えているかどうかにかかっていると述べられています。

本報告では、1 つのチェックリストのみを使用しました。ここで述べられているように、チェックリストの内部を主題分類してチェッキングを行えば、より詳細な分野の強さ弱さが把握できたかもしれません。いずれにしろ、同じ資料であっても資料を使う人によってその重要性は異なるので、多くの観点から蔵書を分析することは必須だと考えます。

4.チェッキング

チェッキングの作業は（表 15）の 3 つに分類されます。調査目的、対象、使用するリストの特徴を考慮して、最適の方法でチェックすることが望まれます。

（表 15）

チェッキング種別	メリット	デメリット

調査者自身が直接調査	いわゆるフィールドワーク方式。調査者が調査対象館の様子を実際に観察し、チェックリスト法だけでは把握できない部分を補う事ができる。	十分な時間と調査者が必要。
調査対象館への調査依頼による調査	広域に渡り複数の図書館を調査する場合に適している。図書館員の誠意ある協力が期待できるところではこの方式は有効。	協力が得られなかった場合の回収率の低下や、チェッキングの不十分さの発生。
総合目録を用いた調査	観察法、インタビュー法、質問紙などといった補助的調査は一切行わず、総合目録に現れた限りで調査。目録さえ十分意整備されていれば作業は最も敏速に進捗する。短期簡にデスクワークで行わねばならない場合には、最適の方法。	他のデータによって不足を補う事ができないので、分析評価が皮相的になる傾向がある。

本報告では、統合目録を用いた調査を行いました。しかし、調査の結果知り得た結果だけでは見えない部分（各大学の選書方法）があるため、調査者自身が直接調査するのが深く分析・評価を行い、改善へつなげるには最も効果の高い方法だと考えます。

5.集計

どのような調査目的、対象でも最低限行うべき集計としては、以下のようなものがあります。

1. リスト所収タイトル数
2. 図書館所蔵タイトル数
3. 非所蔵タイトル数
4. 所蔵率

所蔵率は、図書館所蔵タイトル数 / リスト所収タイトル数で求められます。また、これらの値とたとえば図書館費、奉仕人口、蔵書冊数等と組み合わせてその関係を考察する事もできます。例えば（表 16）のような表を用いると関係がよく分かります。表左の「所蔵率の級分類」とは、たとえば 0～50%の所蔵率をⅢ、51%～75%の所蔵率をⅡ、76%～100%

の所蔵率をⅠとし、「図書館費の級分類」においても同様に一定の範囲毎に級分類を行い、それらの交差する館数を記入し、所蔵率と図書館費の相関を見るものです。もちろん（表16）をヒストグラムにしても、同様の事が表現可能です。

（表 16）は、本報告と同様の方法です。実際に級別に分類して集計したことで、ばらばらのデータだけでは見えなかったことが見えてきました。多数の図書館を対象に実施した場合、この方法は良い集計方法だと考えます。

（表 16）

		図書館費の級分類		
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
所蔵率の級分類	Ⅰ			
	Ⅱ			
	Ⅲ			

また、リスト自体に手を加える方法も存在します。リストを出版年や主題別で分類することで、どの年代・主題の資料に強い（弱い）かが分かります。さらに、リスト中のタイトルを所蔵館数の多少により、”most popular”などのカテゴリーに分け、カテゴリー別の所蔵率を記載することもできます。

図書館同士の重複率を比較して、その図書館の独自性を求める手法もあります。たとえば、A～D の図書館があり、チェックリスト中で A 図書館所蔵タイトル数を A、A と B の重複タイトル数を ab と表現すると、以下のような表を作成できます。ここで、ab/A－ab/B>0 であれば、A の方が独自性があり、逆に ab/A－ab/B<0 であれば、B の方が独自性があるということになります。

（表 17）

	A	B	C	D
A		ab/A	ac/A	ad/A
B	ab/B		bc/B	db/B
C	ac/C	bc/C		cd/C
D	ad/D	bd/D	cd/D	

6.分析・評価

以下では、個別に分析・評価の方法を概観します。

1) 標準得点に換算し尺度を統一する方法

2 種以上のリストを使用する場合は、同じ尺度に換算して比較する必要があります。たとえば、経営学の入門書リストと、経済学の入門書リストでチェッキングを行った場合、A 図書館の経営学の入門書リストで所蔵率が 50%、経済学の入門書リストで 80%だったとします。その他の図書館での所蔵率がそれぞれ、経営学が 20%前後で、経済学が 90%前後だったとすると、標準得点に換算した際、経営学の入門書リストの方が、標準得点が高くなり、所蔵率との間に相違が生じる事となります。これを防ぐためにこの方法が使用されることがあります。

2) 所蔵率を分布して度数分布表にする方法

所蔵率を級区分し、各級に該当する図書館数から分布表を作成します。蔵書を構築する他の要素との相関関係を示す表を用いると、さらに興味深い結論が導きだされます。具体例は、（表 16）をご覧下さい。

3) 主題別所蔵配分比率を分析する方法

複数のリストを使用する場合や、1 種のリストでも内部を主題分類して使用する場合には、各主題の所蔵率を計算することで主題別の配分比率を導きだす事ができます。

4) 蔵書水準の分析

資料の水準ごとに作成したリストによる分析を行うと、蔵書水準の分析が可能です。たとえば、逐次刊行物を、大衆雑誌、専門雑誌、学術雑誌の別に分類したリストを作成し、その所蔵率を比較する事で、水準を確認する事ができます。また、3)の方法と組み合わせることで、主題別の蔵書水準の内容を確認する事ができます。さらに、リスト所収タイトルの利用頻度を調べることで、蔵書水準と利用度の関係について何らかの知見を得る事も可能と思われます。

5) 分布度分析

この方法は、個々の図書館の蔵書構成の分析や評価ではなく、個々のタイトルの評価、同一の親組織をもつ図書館群の蔵書構成分析を行うものです。リスト中の各タイトルの所蔵図書館数を記録し、どのようなタイトルの分布が多いかを分析します。これにより、たとえばベストセラーのタイトルであっても所蔵館数が少ない、もしくは 1～2 年で利用され無くなる可能性が高いタイトルであっても所蔵館数が多い等、様々な事実が浮かび上がると推測されます。どのような事実が発見されるかによって、その図書館群が持つ蔵書構成方針が浮かび上がると推測されます。

6) 2 館比較法

この方法はいたって単純で、2 館の単独所蔵率と重複所蔵率を比較します。図書館群（同一親組織を持つ図書館）の中で使用された場合は、総合的なサービス能力が明らかになります。

以上、6 つの分析・評価法を概観しました。私達が採用した方法は、2）の方法と類似した方法です。3)、4)、5）といった方法も 8.資料で示しているチェックリストを用いて行うことが出来ます。興味を持たれたら是非、自館の蔵書評価を行っていただけたらと思います。

7. 資料

7.1. 図書チェックリスト

ID	回数	タイトル
BN00570922	12	オーガニゼーションズ
BN02254774	11	経営者の役割 = The functions of the executive
BA19242199	6	The functions of the executive
BA04228999	6	Organizations
BN00883826	5	経営戦略と組織 : 米国企業の事業部制成立史
BA03755423	5	The external control of organizations : a resource dependence perspective
BA20899485	5	The management of innovation
BN03452106	5	組織文化とリーダーシップ : リーダーは文化をどう変革するか
BN02147479	5	組織の条件適応理論 : コンティンジェンシー・セオリー
BN02143263	4	シンボリック・マネジャー
BN03439582	4	経営戦略と組織デザイン
BN01138009	4	オーガニゼーション・イン・アクション : 管理理論の社会科学的基礎
BN03195670	4	経営行動 : 経営組織における意思決定プロセスの研究
BN00521144	4	人間性の心理学
BN01844998	4	新しい企業組織 : 原点回帰の経営学
BN01766067	4	企業文化の変革 :「社風」をどう管理するか
BA01013861	4	A behavioral theory of the firm
BA30184121	4	組織化の社会心理学
BA11931135	3	The nature of managerial work
BA0070349X	3	Organization design
BA00857507	3	Organizational learning : a theory of action perspective
BA01128488	3	Organizations in action : social science bases of administrative theory
BA03444354	3	Handbook of organizational design
BA65087981	3	Business leadership in the large corporation : with a new preface
BA03996066	3	The social psychology of organizing
BN00403556	3	組織心理学
BN00499238	3	経営行動論
BN16130554	3	不連続の組織変革 : ゼロベースから競争優位を創造するノウハウ
BN00080719	3	市場と企業組織
BA00557445	3	Organizational culture and leadership : a dynamic view
BN01310927	3	仕事とモティベーション
BA03919189	3	Strategy and structure : chapters in the history of the industrial enterprise

BN05177363	3	企業の人間的側面 : 統合と自己統制による経営
BN09001369	3	組織間関係 : 企業間ネットワークの変革に向けて
BA1058180X	2	Existence, relatedness, and growth : human needs in organizational settings
BN0569678X	2	知識創造の経営 : 日本企業のエピステモロジー
BA04836203	2	Work and motivation
BA04836305	2	Power in organizations
BA07156839	2	The motivation to work
BA07221781	2	Managing across borders : the transnational solution
BA20572281	2	People-processing : the street-level bureaucrat in public service bureaucracies
BA1032815X	2	Decision making at the top : the shaping of strategic direction
BN05055333	2	現代組織の構図と戦略
BA19245302	2	The managerial revolution
BA19441617	2	Administrative behavior : a study of decision-making processes in administrative organization
BA19914082	2	Organizing for the future : the new logic for managing complex organizations
BN00447187	2	内発的動機づけ : 実験社会心理学的アプローチ
BA0903537X	2	Organization and environment : managing differentiation and integration
BA01765539	2	Corporate strategy : an analytic approach to business policy for growth and expansion
BA00569025	2	Organizational psychology
BN15065617	2	21世紀企業の組織デザイン : マルチメディア時代に対応する
BA00731757	2	Victims of groupthink : a psychological study of foreign-policy decisions and fiascoes
BN14606733	2	コンピュータ化の経営管理
BA00932486	2	Markets and hierarchies, analysis and antitrust implications : a study in the economics of internal organization
BN12959696	2	組織におけるあいまいさと決定
BN06581502	2	組織の心理学
BN1111705X	2	企業文化が高業績を生む : 競争を勝ち抜く「先見のリーダーシップ」: 207社の実証研究
BA03755911	2	Ambiguity and choice in organizations
BN10997865	2	国際比較経営論 : アジア太平洋地域の経営風土と環境
BA03522822	2	Organizations and environments
BA03677341	2	Handbook of industrial and organizational psychology

BA03747028	2	Strategy implementation : the role of structure and process
BN09618303	2	スケール・アンド・スコープ : 経営力発展の国際比較
BN04272926	2	仕事と人間性 : 動機づけ-衛生理論の新展開
BA01111893	2	The Organizational life cycle : issues in the creation, transformation, and decline of organizations
BN00891008	2	組織と管理の基礎理論
BN02477655	2	新訳産業文明における人間問題
BN02179624	2	給与と組織効率 / E.E.ロウラー三世著 ; 安藤瑞夫訳
BN00559384	2	内部組織の経済学
BN02178417	2	新しい管理者像の探究
BN00679309	2	組織革命
BA19967759	2	The organizational revolution : a study in the ethics of economic organization
BN02144266	2	横断組織の設計 : マトリックス組織の調整機能と効果的運用
BN02726556	2	組織とパーソナリティー : システムと個人との葛藤
BN01038966	2	エクセレント・カンパニー : 超優良企業の条件
BN01094140	2	多国籍企業の組織と所有政策 : グローバル構造を超えて
BN01119172	2	システムの科学
BN01131655	2	リーダーシップ行動の科学
BN01930080	2	経営者革命
BN01214989	2	企業戦略論
BN00735793	2	産業ならびに一般の管理
BA5122584X	2	Rethinking strategy
BA23995055	2	TVA and the grass roots : a study in the sociology of formal organization
BA26035580	2	Industrial organization : theory and practice
BA27679363	2	Leadership in administration : a sociological interpretation
BN04209045	2	組織の行動科学 : ヒューマン・オーガニゼーションの管理と価値
BA31450151	2	経営戦略 : 創造性と社会性の追求
BA34032205	2	競争優位のイノベーション : 組織変革と再生への実践ガイド
BN00463423	2	新・経営戦略の論理 : 見えざる資産のダイナミズム
BA46414821	2	現代生産システム論 : 再構築への新展開
BN02639087	2	現状変革型リーダー : 変化・イノベーション・企業家精神への挑戦
BA53430260	2	現代経営キーワード
BA58882689	2	組織設計のマネジメント : 競争優位の組織づくり
BN03052414	2	経営の行動科学 : 新しいマネジメントの探求
BA67386746	2	組織の変化と組織間関係 : 結びつきが組織を変える

BN02848677	2	企業の行動理論
BN01668385	2	新しい産業国家
BA43601006	2	戦略サファリ ： 戦略マネジメント・ガイドブック

7.2. 雑誌チェックリスト

ID	回数	タイトル
AN00135007	17	組織科学 = Organizational science
AA0001809X	16	Administrative science quarterly
AA00043778	13	The Academy of Management review
AA00205665	9	Harvard business review
AA00328009	9	Organizational behavior and human performance
AN00359263	8	Diamondハーバード・ビジネス : the magazine of decision makers
AA00022632	7	American sociological review
AA00208641	7	Human relations
AA00294483	7	Management science : application and theory
AA00402928	6	Research in organizational behavior
AA10809852	6	Organization science : a journal of the Institute of Management Sciences
AA00331728	5	Organizational dynamics : a quarterly review of behavioral and management sciences
AA10666653	5	California management review
AA00445090	5	Strategic management journal
AA00276481	4	Long range planning / Society for Long Range Planning.
AN00069864	4	經濟科學
AA00243314	3	Journal of management studies
AA00021902	3	The American journal of sociology
AA10564697	3	Academy of Management journal
AN00114186	3	商学論集
AN00071185	3	經濟と經濟學
AN00234698	2	戦略的提携と組織間学習 － その試論的検討 －
AA0005545X	2	Annual review of sociology
AA00092966	2	Business horizons
AA0034529X	2	Psychological review
AA00243336	2	Journal of marketing
AN00002218	2	IEレビュー
AA11359740	2	関東学園大学経済学紀要
AA11034407	2	Organization : the interdisciplinary journal of organization, theory and society
AA00411849	2	Sloan management review
AA00412149	2	Social forces
AA00240575	2	Journal of applied psychology

<参考文献>

1）Maureen Martin Watson, M.S. The Association of Vision Science Librarians' citation analysis of Duane's Clinical Ophthalmology. Journal of the Medical Library Association. 2003, vol.91, 1, p.83-85.
http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC141192/. (accessed 2009-11-1).

2）ランカスター［著］；中村倫子，三輪真木子共訳．図書館サービスの評価．東京，丸善，1991, 228p.

3)書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト．書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告. 2005, 11p.
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/about/infocat/pdf/kadaiPT-last-report.pdf, (accessed 2009-12-20).

4)国立国会図書館．蔵書評価に関する調査研究．国立国会図書館，2006.図書館調査研究リポート No.7, 144p,
http://current.ndl.go.jp/files/report/no7/lis_rr_07.pdf, (accessed 2009-12-20).

5)OCLC. “WorldCat collection analysis [OCLC –management service and systems]”.
http://www.oclc.org/collectionanalysis/, (accessed 2009-12-20).

6）河井弘．チェックリスト法による公共図書館蔵書分析評価法. Library and information science. 1971, No.9, p.179-207.

7)気谷陽子．博士論文の引用分析を用いた博士課程大学院生の文献利用についての研究—筑波大学の事例．大学図書館研究. 2002, 66, p.33-41.

8)後藤久夫．チェックリスト法による大学図書館における蔵書評価の一例−東京都立大学附属図書館における初学者向け図書の収集状況−．大学図書館研究. 1999, 62, p.39-42.

9)日本図書館協会．日本の図書館．東京，日本図書館協会, 2008.

10）芳鐘冬樹．日本における図書館情報学分野の計量的研究の動向－計量書誌学研究を中心に－．カレントアウェアネス, 2009, No.299, p.20-23,
http://current.ndl.go.jp/files/ca/ca1687.pdf, (accessed 2009-12-20).